

添付資料13 トルコおよび台湾のケーススタディー(既存報告書のレビュー)
 — 派遣概要、結果の評価、実施体制の評価 —

I. トルコ西部地震(1999年8月)

災害状況	1999年8月17日午前3時2分(日本時間同日午前9時2分)、トルコの首都イスタンブール東方約110kmのイズミット市付近を震源に、マグニチュード7.4の地震が発生し、イズミット市、アダパザル市、イスタンブール市を中心に甚大な被害が生じた。死者15,466名、負傷者23,954名、住宅を失った人500,000人、最も甚大な被害を受けたキルジュック市からアダパザル市に至る約30kmの地域では家屋の6割近くが全壊した(1999年9月12日時点のトルコ政府危機管理センター情報)。								
要請の背景	トルコ政府からの要請を受け、外務省は「救助チーム」については8月17日、「医療チーム」は8月17日(第一陣)と8月26日(第二陣)に、「専門家チーム」については8月20日に各々財務省との協議を経て、国際緊急援助隊を派遣する旨決定、JICAに派遣を命令した。								
活動サイト	救助チーム:	ヤロヴァ県ヤロヴァ市及びその周辺(4地域21カ所:ヤロヴァ15カ所、カラマンシティ-3カ所、チフトリックキョイ3カ所、ジャラケント1カ所)							
	医療チーム:	カフラマンシティのマンション倒壊現場及びその周囲での診療活動の後、アダパザルの石炭貯蔵庫に診療所を設置							
	専門家チーム:	イスタンブール市郊外、デルメンデレ沿岸部、アダパザル市中心部、コジャエリ県イズミット郊外							
活動結果の評価		中間目標1				中間目標2			
	救助チーム:	12名発見、6名救出(1名は生存者、5名は遺体) (18日3名救出、19日1名生存者救出、20日2名救出)				<ul style="list-style-type: none"> ● 日本の各新聞社はほぼ毎日報道をしていた。その内容は、「深夜まで救出活動をする姿に感動した」、「遺族が感謝の握手を求めた」、「救出者の親族から感謝の言葉が贈られた」等。 ● 日本チームの技術と機器が被災地住民に評価され、他国チームが救助活動を行った現場についても日本チームに再度救助活動を求めてくるほどであった。 			
	医療チーム:	震災による急性疾患患者を中心に第1陣が804名、第2陣が801名、合計1,605名を診察				<ul style="list-style-type: none"> ● 活動期間中にNHK、関西テレビ、共同通信社、神戸新聞等の取材、赤新月社他のNGOの来訪、カナダ軍・エジプト軍・イスラエル軍など他の「医療チーム」への情報提供等を行った。 ● 隊員は受診者から親愛感・期待感を寄せられ、患者の中には感謝の涙を流す者もあった。また、隣接するテント村のボランティアと子供達が撤収日に送別会を実施。機材返送もトルコ航空が善意によって無償で輸送。 			
	専門家チーム: (耐震診断) (仮設住宅指導)	①応急危険度判定に関する技術的支援、②仮設住宅建設に対する協力、③インフラ・ライフラインの復旧・復興支援、④恒久住宅の再建に関する支援、⑤中長期的視点からの技術支援				特に情報なし			
その他	緊急援助物資としてテントや毛布・発電機等といった4,800万円相当の物資が供与され、60万ドルの緊急無償資金協力も併せて実施した。								
チームの活動概要	救助チーム			医療チーム			専門家チーム		
	派遣期間	人数	チーム構成および経費概算 ¹	派遣期間	人数	チーム構成および経費概算	派遣期間	人数	チーム構成および経費概算
	8/17~8/24 (8日間)	第一陣 (20人)	団長1名、総括官1名、隊長2名、救助隊員29名、業務調整員6名 携行機材(搜索・救助用資機材、通信機器等) 110,431千円	8/18~8/31 (14日間)	第一陣 (16人)	団長1名、医師3名、看護師6名、医療調整員3名、業務調整員3名(途中から1名増員) 携行機材(医薬品、医療資機材等) 57,750千円	8/22~8/28 (7日間)	第一陣 (8人)	震災対策/コーディネーター1名、建築防災1名、道路・橋梁1名、耐震設計1名、協力計画1名、業務調整2名、通訳1名 14,321千円
8/18~8/24 (7日間)	第二陣 (17人) + 現地参加者 (2人)		8/27~9/9 (14日間)	第二陣 (15人)	団長1名、医師2名、看護師6名、医療調整員3名、業務調整員3名 携行機材(医薬品、医療資機材等) 55,115千円	10/12~11/9 (29日間)	第二陣 (13人)	建築計画/コーディネーター1名、建築計画1名、建築指導7名、輸送計画1名、業務調整3名 20,882千円	

¹ 概算経費には機材輸送費も含まれる。

実施体制の概要	<ul style="list-style-type: none"> ● 8月17日(火)9:02 発災(現地時間 3:12) ● 同日 9:30 要請あり ● 同日 21:40 派遣決定 ● 21:55 先発隊成田発(20名) ● 18日(水)午前中、後発隊成田発(17名)(ただし現地参加2名) ● 18日(水)14:25 イスタンブール空港到着、19:45分現地際策本部到着、活動開始 ● 19日(木)5:00 後発隊現地対策本部到着、活動開始 ● 21日(土)4日目の活動開始 ● 22日(日)8:00 活動終了、チーム内総括会議 ● 23日(月)10:00 活動報告(日本領事館)15:25分イスタンブール発。24日(火)成田着 	<ul style="list-style-type: none"> ● 8月17日 21:00 派遣決定 ● 18日(水)22:00 第一陣成田発(17名) ● 19日(木)イスタンブール着 ● 21日(土)診療所開設、診療実施。(8月28日まで) ● 27日(金)7:45 第二陣羽田発(関空経由) ● 27日(金)20:00 イスタンブール着 ● 28日(土)第一陣から第二陣への業務引継ぎ ● 29日(日)～9月5日(日)午前、診療実施 ● 9月5日(日)午後撤収作業 ● 9月6日(月)対策本部活動報告、被災地視察 ● 9月7日(火)返送機材積み込み作業、 ● 9月8日(水)活動報告、15:25 イスタンブール発。9日(木)成田着 	<p><u>第一陣(耐震診断)</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 8月22日(日)13:10 成田発(8名) ● 同日 20:00 イスタンブール着 ● 23日(月)～26日(木)被災状況等調査 ● 27日(金)15:20 イスタンブール発、帰国 <p><u>第二陣(仮設住宅建設指導)</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 9月20日(月)0:30 派遣決定 ● 10月12日(火)11:30 先発隊成田発(5名) ● 同日 20:00 イスタンブール着 ● 10月13日(水)関係省庁との協議開始 ● 10月19日(火)11:00 後発隊成田発(8名) ● 10月22日(金)現場管理開始 ● 11月8日(月)15:30 イスタンブール発、11月9日(火)成田着
① タイミング	<p>良い点</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 第一次隊は発災後 41 時間後に救出活動を開始し、1999 年 1 月のコロンビア地震災害派遣時の「救助チーム」到達最速記録を更新した。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 発災後 6 日目に、被災地入りした。(第一陣)
課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 現地対策本部・副知事から推薦されたサイトでは「医療チーム」不要とされ、診療開始までに 4 日間(106 時間)を費やした 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。(第一陣、第二陣)
② 活動体制	<p>良い点</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 検索活動を優先し、遺体を発見しても収容に長時間を要する場合は、生存者のいる可能性のある他の現場に移動し、実際に生存者を発見・救出できた(「救助チーム」発足以来初の生存者救出)。 ● 72 時間を過ぎても生存者が救出されるケースがあり、救助期間を約 2 日延長した。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 当初は約 35℃前後の気温で隊員の脱水症状が懸念された。チームに分けて、休息が取れるようにした。 ● 毎晩全体ミーティングを開催し、方針を確認した。 ● 宿営地から活動サイトまでの移動距離が非常に長く(約 2 時間半)、移動中の安全確保が非常に重要な問題であった。 ● 服薬回数・時間やうがい液、湿布の使用方法に関する指示もトルコ語に翻訳印刷して薬局で活用した。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 専門家の能力は非常に高く、トルコへの技術移転が進んだ。(第二陣)
課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 現地入りした際にサイトが未決定だった。(トルコの場合、医療診療用の大型テントについては、航空、輸送の重量の問題から携行できず既存の施設を探さざるを得なかった。) ● 公衆衛生のための体制が不足していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。(第一陣、第二陣)
③ ロジック面	<p>良い点</p> <ul style="list-style-type: none"> ● JICA 英国事務所・エジプト事務所から業務調整員として 2 名が現地参加。 	<ul style="list-style-type: none"> ● トルコ語－日本語の通訳人材は豊富であり、JICA トルコ事務所・在トルコ日本大使館を通じて確保を十分できた。 ● リスク管理のため、車 2 台に分乗、無線機の配置を行い移動した。長時間の移動の間に車内で打合せが可能であった ● 宿営は隊員の安全、健康面からホテルを原則としているためや野営機材セットはなかったが、「事後評価」時点(2003 年 3 月)で野営機材セットを準備中。 ● 一次隊は、パリ乗り継ぎに際し 5 時間の待ち合わせ時間を費やした。2 次隊はイスタンブール直行便に搭乗できた。 ● JICA 英国事務所・フランス事務所からの応援が得られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 大使館・JICAトルコ事務所のサポート、隊員の JICA 業務調整員の支援ともに万全だった。(第二陣) ● 兵庫県から無償で仮設住宅(使用済み)が提供された。(第二陣) ● 仮設住宅の海上輸送にあたっては、海上自衛隊艦船の協力が得られた。(第二陣)
課題	<ul style="list-style-type: none"> ● JICAトルコ事務所の関与が不明 	<ul style="list-style-type: none"> ● ホテルのファックスが不調な上、インマルサット・イリジウムによる通信が通信環境および使用者の習熟度の問題でうまく繋がらなかった。 ● 現場に近いホテルは閉鎖されていたり安全上問題があり、現場から遠いイスタンブールに宿泊せざるを得なかった。 ● JICA 英国事務所・フランス事務所からの応援では、トルコ語・トルコ事情に詳しくなく負担が重い。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 事前に JICA トルコ事務所に連絡を取れば持参不要とわかる携行機材も持参してしまった。(第二陣) ● 短期間のうちに仮設住宅を解体・輸送する必要性から、(本来なら同一規格が望ましいが)仮設住宅のメーカーが多岐にわたった。(第二陣) ● 第一陣が確保した宿舎が現場から遠く、第二陣はより近距離の宿舎を確保した。(第一陣、第二陣)

④ 情報公開	良い点	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 活動期間中に日本のテレビ局・新聞社、現地の NGO、各国軍「医療チーム」に情報提供するなど、情報発信体制は適切に機能した。 ● 日本国内でも大きく報道され、阪神大震災の経験に基づく相互扶助の国民意識も強く、派遣について関心も高かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 第一陣・第二陣ともに団長が対応した。(第一陣、第二陣) ● 「地震」、「地図」、「仮設住宅団地計画図面」、「被災状況と仮設住宅建設概要」、「建築写真」、「被災者へのメッセージ」に関するパネル展示を行った。(第二陣) ● 現地およびオランダのテレビ局・新聞社の取材だけでなく、日本のテレビ局、新聞社、研究機関の取材にも協力(第二陣)
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 事前・活動中の対外的な情報発信は不十分であり、各国ドナー・国際機関等は緊急援助隊「医療チーム」について低い認知度であった。 ● 新聞報道では必ずしも日本チームの活動について正確に伝えられなかった様子。 ● トルコ政府保健省の公式記録に「医療チーム」の活動が記録されていなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。(第一陣、第二陣)
⑤ 現地対策本部、国際機関との連携	良い点	<ul style="list-style-type: none"> ● 現場到着後直ちに現地対策本部と協議を行い、その後も活動を報告した。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 被災地の現地対策本部を中心に情報収集を行い、活動終了時には英文報告書を提出した。 ● 現地対策本部からは消耗品の提供も受けた。 ● 在トルコ大使館、総領事館から協力を得た。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 現地到着後だけでなく、活動中・活動終了時にも現地期間との情報交換・報告を行っていた。(第二陣)
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ● アンカラではドナー会議が開催され日本大使館員が参加した。現地対策本部ではドナー会議等は開催されなかった。 ● 現地対策本部・保健当局との連携・協調体制が不足していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本から公共事業省本省に提出した図面・仕様書・工程表が地方局に渡っていなかった。(第二陣)
⑥ チームの能力	良い点	<ul style="list-style-type: none"> ● 消防庁と海上保安庁でチーム編成され、業務の関係で警察庁は参加しなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 過去の派遣経験者が、効率的な診療活動に貢献した。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 専門家として、自治体都市開発関係者や住宅会社社員等が派遣された。(第二陣)
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 第二次隊は派遣医師が 1 名減となったが、患者に優先度を設定し、日本大使館医務官の応援により対応した。 ● 薬剤師を入れることが薬局の運営には必須である。同時に登録者を増やすことが必要。 ● 医師のひとりが、副団長(メディカル・コーディネーター)を兼任したが、実際には医師は診療業務に専念したため、期待された現地対策本部とのドナー会議の開催等の呼びかけを行うことはできなかった。 ● 業務調整員が合計 7 名派遣されたが、JICA 職員は 2 名であった。特に第一陣業務調整員は未経験者のみであった。(その後、JICA国際緊急援助隊事務局内に、業務調整専門家 3 名を常置した。) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。(第一陣、第二陣)

II. 台湾地震災害(1999年9月)

(4/5)

状況	現地時間 9月21日午前1時47分(日本時間同2時47分)、台北の南西約145kmにある南投県日月潭の西方約12kmにある集集鎮を震源としたマグニチュード7.6の地震が発生、ビルや家屋の倒壊、火災の発生などにより、震源地の南投県や台中県を中心に台湾各地に甚大な被害をもたらした。死者2,160人、負傷者8,734人、行方不明者12人、被災者10万人、全壊家屋8,457戸、半壊家屋6,204戸(1999年9月30日午前10時現在のデータ)。								
背景	日本政府は、9月21日、UNOCHAより要請を受け、国際緊急援助隊(「救助チーム」、「医療チーム」、「専門家チーム」)の派遣決定を行った。								
サイト	救助チーム:	南投県・台中県・台北県およびその周辺の被災地8つの市と町の活動場所17箇所、検索場所合計85カ所							
	医療チーム:	震源地集集鎮に隣接する南投県鹿谷郷秀峰小学校および最大被害のあった中寮郷地区の郷公所(町役場に相当)にて診療所設営							
	専門家チーム:	台中市、台中県、南投県							
活動結果の評価		中間目標 1				中間目標 2			
	救助チーム:	行方不明者8名発見、7名救出(7名とも遺体) (救出者:22日埔里2名、中寮郷3名、23日集集郷1名、24日大里市1名)				現地新聞各誌、テレビ各局は連日日本のレスキュー活動を大きく報じた。主な内容としては、「各国チームの中で日本チームが最大規模であったこと、最も早く被災現場に到着し活動を開始したこと、専門技術の高さと人命救助の精神に台湾側レスキュー人員登録状況・各省庁との連絡体制のみならず台湾民衆の敬服と感動を呼び起こしていること」等			
	医療チーム:	地震災害で被害を受けた負傷者等に対して、1,041名の患者を診療・治療				診療を受けること以上に、日本からはるばる支援に来てくれたことに感謝する人々多かった。			
	専門家チーム:	①被害を受けた建物・インフラの安全性確認、②建築物の被災状況及び応急危険度判定の制度等に関する調査、③我が国からの協力ニーズについての調査、④応急危険度判定方法及び補強策についての技術的指導と助言				特に情報なし			
その他	援助物資として、シンガポール倉庫からテント180張、発電機80台、コードリール80台、総計約2,980万円相当が供与された。								
チームの活動概要	救助チーム			医療チーム			専門家チーム		
	派遣期間	人数	チーム構成および経費概算 ³	派遣期間	人数	チーム構成および経費概算	派遣期間	人数	チーム構成および経費概算
	9/21~9/28 (8日間)	先遣隊 (5人) 第一次隊 (34人) 第二次隊 (36人)	団長1名、警察45名、消防46名、海保13名、 業務調整員5名 携行機材(搜索・救助用資機材、通信機器等) 113,574千円	9/22~10/5 (14日間)	13人	医師2名、看護師4名、医療調整員2名、 業務調整員5名 携行機材(医薬品、医療資機材等) 38,490千円	9/27~10/1 (5日間)	第一陣 耐震診断 (6人)	団長・震災対策1名、建築防災1名、耐震診断 1名、建築構造1名、協力計画1名、業務 調整1名 5,582千円
	9/22~9/28 (7日間)	第三次隊 (35人)				10/6~10/10 (5日間)	第二陣 危険度判定 (11人)	団長1名、危険度判定専門家5名、業務調整 員1名、通訳2名、現地参加(交流協会職員) 2名 157,646千円	
実施体制の概要	<ul style="list-style-type: none"> ● 9月21日(火)2:47 発災(現地時間 1:47) ● 9月21日(火)午前中、UNOCHAを通じて在スイス日本大使館に要請あり。(21:45 派遣決定) ● 9月21日(火)14:00 先遣隊羽田発(4名)、17:20 第一次隊羽田発(34名)、19:00 第二次隊羽田発(36名) ● 9月21日(火)23:00 第一次隊、新庄市ビル倒壊現場に到着。第二次隊、23:20分合流。 ● 9月22日(水)7:25、第一、二次隊、南投県対策本部に到着、埔里で活動。22:30分中寮郷に到着 ● 9月22日(水)第三次隊羽田発(35名)16:00 南投県対策本部に到着、20:30 中寮郷で活動開始 ● 9月26日(日)まで救助活動の実施 ● 9月27日(月)実施機関への報告 ● 9月28日(火)帰国 			<ul style="list-style-type: none"> ● 「医療チーム」派遣についての追加要請あり。 ● 派遣決定 ● 9月22日(水)17:20 羽田発(11名) ● 9月23日(木)午前1:00 被災現場入り。鹿谷郷秀峰村国民小学校にて午前テント設営、診療開始。24日、25日まで診療実施(合計3日間診療活動を実施した) ● 9月24日(金)、25日(土)中寮郷公所前においても診療実施。9月26日(日)午後、中寮郷国民小学校避難所中庭に移動し、10月2日まで診療活動を実施 ● 10月3日(日)午後撤収活動(合計10日間の診療活動を実施した。) ● 10月4日(月)報告 ● 10月5日(火)帰国 			<ul style="list-style-type: none"> ● 「専門家チーム」派遣についての追加要請あり。 ● 9月25日(土)1:50 派遣決定 <p><u>第一陣</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 9月27日(月)17:20「震災対策「専門家チーム」」羽田発(6名) ● 9月28日(火)~10月1日(金)活動実施 ● 10月1日(金)帰国 <p><u>第二陣</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 10月6日(水)11:10「危険度判定専門家チーム」羽田発(11名) ● 10月6日~9日活動実施 ● 10月10日(日)帰国 		

² 「台湾地震災害救済国際緊急援助隊専門家チーム報告書」

³ 概算経費には機材輸送費も含まれる。

評価 タイミング	良い点	<ul style="list-style-type: none"> ● 政府間関係のない地域への初の国際緊急援助隊派遣であったが、UNOCHAからの要請に基づき決定。 ● 地震発生後16時間後には先遣隊が被災現場に到着。(第一次隊は21時間後)台湾側は極めて迅速であったと評価している。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 発災後48時間で被災地入りしている。迅速なタイミング。 ● 「医療チーム」が派遣された中で最も近い被災国 	<ul style="list-style-type: none"> ● 発災後6日目に、被災地入りしている。(第一陣)
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。(第一陣、第二陣)
②活動体制	良い点	<ul style="list-style-type: none"> ● 三庁の混成部隊を組成し指揮系統を明確にし、効率的な人命探索、救助活動を行うことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 地元村長や軍・慈済功德会(宗教団体)「医療チーム」の側面支援を得られたので、診療活動に専念できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。(第一陣、第二陣)
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 現地側の情報に基づき、日本チームは当初台北市で活動を行ったが、必要性が低いことが判明し、南投県が活動拠点として与えられた。 ● 「事後評価」の際(2003年3月)に南投県消防署から、「生存者なし」として撤収した現場から後に生存者2名が発見されたことについて、「資機材等に依存しすぎている」との指摘も受けた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 現地入りした際にサイトが未決定。 ● 医療活動場所を変更した。鹿谷での診療停止・撤収、中寮郷への移動の理由:①中寮で医療ニーズがより高いことが判明、②鹿谷の重傷者はほぼ全員病院に収容された等。中寮での活動終了の理由:①急性期の外傷の減少、慢性疾患への治療に移行。②伝染性感染症の可能性が低い等。 ● 医師2名体制について、休みのない中の活動となり、負担が多かった。 ● 余震による被害に巻き込まれる危険ある中、安全確保の懸念があった。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 現地関係機関に対して、助言は実施しているが、現地での活動終了までに、報告書の作成はしているが、いつ提出したのか不明。(第一陣、第二陣)
③ロジ面	良い点	<ul style="list-style-type: none"> ● JICA フィリピン事務所から業務調整員として2名が参加。 ● (財)交流協会と亜東関係が協力した。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 現地でボランティア通訳の募集を行い、活動全体を通じて37名が参加した。(財)交流協会が総括した。 ● (財)交流協会が、機材の通関手続き、車両の手配、通信手段(携帯電話)の確保、宿泊場所の手配、情報収集等を実施し、チームを支援した。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。(第一陣、第二陣)
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 今回は本制度初の大規模派遣であったため、携行機材が不足した(不足分は東京消防庁等から借用した)。 ● 同様に業務調整員も不足していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 携行した2台の通信機器(イリジウム、インマルサット)使い勝手に長短があり、交流協会から貸与された携帯電話が役に立った。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。(第一陣、第二陣)
④情報公開	良い点	<ul style="list-style-type: none"> ● 団長や、業務調整員がインタビューを受けた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 副団長はマスコミ対応等を行い、団長への負担軽減にも努めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。(第一陣、第二陣)
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。(第一陣、第二陣)
携 ⑤現地対策本部、国際機関との連	良い点	<ul style="list-style-type: none"> ● 空港到着後、日本交流協会を通じて手配したマイクロバスで現場に移動した。台湾側現地受け入れ窓口機関である亜東関係協会関係者から災害状況等の説明を受ける。 ● 亜東関係協会および消防庁の職員数名が、全工程に同行し、各地で地元関係者との調整、情報収集、連絡調整等を行った。 ● 台中県に到着した際にも現地対策本部で情報収集に努めたが、台湾側の人員不足のより我が国チームへの十分な情報提供が行われなかった。 ● 現地での活動に当たり、台湾、韓国、ロシア、米州チームと協調した。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 23日未明に南投県対策本部に到着したが、全ての情報を把握しているわけではなく、基本的には自らサイトを選択した。 ● 団長、副団長、通訳ほかで毎日診療の前後2回、南投県対策本部に立ち寄り、活動計画および経過・活動報告を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。(第一陣、第二陣)
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。(第一陣、第二陣)
⑥チーム構成	良い点	<ul style="list-style-type: none"> ● 過去最大の人数を派遣した。 <p>外務省・3庁・JICAによる混成チームのため、明確なリーダーシップが発揮されず、決定までに時間がかかったうえ、決定事項が一般隊員まで周知徹底されなかった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 2(医師)、4(看護師)、2(医療調整員)の構成で通常より縮小チームであったが、今回は短期間で3ヶ所のサイトを移動したため、小回りが利いてよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。(第一陣、第二陣)
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 団長(医師)、副団長(JICA)となり、従来の「医療チーム」とは異なるチーム構成。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 特に情報なし。(第一陣、第二陣)